

---

# パチュリー、甘噛み、フラン。

古荒 瓜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

パチユリー、甘噛み、フラン。

### 【Nコード】

N7318J

### 【作者名】

古荒 瓜

### 【あらすじ】

パチユリーは妹様の話し相手になるために、彼女の部屋を訪れたのでした。

## (前書き)

この作品は東方 project の二次創作であり、世界観・設定・キャラなどが公式とは一致いたしません。ご注意ください。  
あと山もオチも意味もない二次創作となっております。重ねてご注意ください。

明りのほとんどない、薄暗い部屋。

小柄な少女の姿をしたそれは、ベッドに腰掛け、床につかない足をぶらぶらさせて遊んでいた。背中から生えた羽が禍々しい光を放っている。

フランドール「スカーレット。彼女はこの館の主の妹で 吸血鬼であった。」

館の主であり、彼女の姉でもあるレミリア「スカーレットは、妹の強大な力と残虐な性格を恐れ、館の最深部にあるこの部屋に彼女を閉じ込めていた。 数百年の間。」

そのかたわらで椅子に座り、手にしたティーカップの紅茶を眺めている少女。レミリアの友人であり、食客しよっかくでもある魔法使い、パチユリー「ノーレッジ。見た目とは裏腹に彼女も百年を生きる人外の存在である。」

パチユリーはひとつ、大きなため息をついた。カップには口をつけずに、静かに言葉を発する。少し、咎めるような口調。

「フラン。いい加減にしてほしいわ」

「なにが」

「咲夜のことよ」

パチュリーはこの館のメイド長を務める人間の名前を出す。

「昨日、咲夜の血を飲みすぎて、咲夜を殺しかけたでしょう」

「だって咲夜がいって言ったんだもん」

「咲夜はあなたの言うことならなんでも聞くから、あんまりわがまま言うものじゃないわ。本当に危なかつたんだから。それにわたしは薬の調合は苦手なのよ。今回はたまたま運良く助かっただけ」

だってうちのメイドなんだし、メイドは主人の命令に従うものだし、それに咲夜の血をいっぱい飲みたかつたんだもん、とフランドールは小さくつぶやく。

パチュリーはまた大きなため息をついて言った。

「あまり、咲夜をいじめないでちょうだい。本当のことを言うと、あの子にあなたの食事の用意をさせるのも、わたしはいい気持ちしないの」

「どうして？」

フランドールはきよとんととして、パチュリーに尋ねた。パチュリーは虚空を見つめながら答える。

「だって、あの子は人間だもの。人間に、人間を狩らせるのは、少し、酷よ」

「何言ってるの。パチュリーは人間を臍<sup>ひいき</sup>舐<sup>たぶら</sup>しすぎなのよ。あの黒い人間の魔法使いに誑<sup>たぶら</sup>かされているんじゃないの」

フレンドールは不満そうに羽をばたばたと動かしてそう反駁<sup>はんぱく</sup>した。

パチュリーは落ち着いた声で諭すように言う。

「あなたも咲夜のことは好きなんでしょう。咲夜は人間よ」

フレンドールは眉間にしわをよせて言い返す。

「わたしは咲夜だけいればいいもん。他の人間なんて知らないわ。パチュリーは人間全部をかばう。やっぱりあの黒い奴の影響でしょ」

「そうね。そうかもしれない。でも、」

パチュリーはティーカップをサイドテーブルに置く。そのまましばらく考えて、続けた。

「命令して同族に同族を殺させるってのはね、よくないと思うわ。夜雀は鳥を殺さない、兎は兎を殺さないし、あの山で蛙を殺せばおつかない神様がやってくる。人間に人間を殺させるのは、主<sup>あも</sup>としてどうかしらね」

「よくわかんない。全然わかんない。それがどうして悪いの？ なぜ夜雀は鳥を殺さないの？ 別に夜雀が焼き鳥食べたって構わないとわたしは思うわ」

それを聞いてパチュリーは薄く笑う。

「これだから妹様は外に出せないのよね。たまには何かを壊すことに躊躇ちゆうしゆというものを感じてほしいわ」

「外に出たい。雨降らせるの、やめてよ」

「駄目よ。レミィに頼まれているんだから」

あっさり断られて、フレンドールは不機嫌そうにぷいっと横を向く。

可哀そうに、とは思いが、パチュリーとて館の主の命とあらば従わないわけにはいかない。

「ふん、パチュリーなんかそのうちやつつけてやるんだから」

「どうかしらね。五分五分かもしれないけれど、その時はわたしも全力で迎え撃つわ。太陽の光で灰ロイヤルフレアになっても知らないわよ」

「あーあ、吸血鬼ってつまんない。弱点が多すぎだもの。パチュリーとは相性が悪すぎるわ」

「弱点があって助かったわ。そうじゃなかったらあなたは幻想郷を破壊しつくしてしまう」

フレンドールはさらに不機嫌になってベッドの上をぐるぐる転がった。

しばらくベッドの上で一人暴れていたが、ぴたりと動きを止め、沈んだ声で言った。

「ねえ、パチュリー。あなたは怖くないの？」

「なにが？」

「あの黒い人間はすぐ死ぬわ」

ぴくりとパチュリーの体が反応する。

「あっという間よ。わたしたちと違って、数十年もすればあいつは死ぬ」

「そうね」

「咲夜も死ぬ」

「そうね」

「咲夜はいなくなる」

「そうね」

「わたしは怖いわ。どうせ失うなら、咲夜の血肉を全部わたしのものにしたいたい」

パチュリーはため息をつくど、椅子から立ち上がり、ベッドの上で横になって足をばたばたさせ始めたフランドールの傍らに座った。



フランドールの自慢の羽を撫でてやる。

「そうしてあげたら？ フラン」

「……食べちゃって、いい？」

「その方が咲夜も喜ぶかもしれない」

「なんで？」

「だって、もう人間を襲わなくてよくなるもの。ナイフで同族の皮膚を切り裂いて血を抜き取ることもしなくてよくなる。その苦行から抜けられるのなら、あなたに食べられた方がうれしいかもしれないわ」

「やだ。咲夜を食べたくない。いなくなってほしくない。ずっと、いてほしい」

咲夜のいない日々を想像でもしたのだろうか。フランドールは顔をしかめる。

「さみしいのよね、妹様は。わたしにも、わかる」

フランドールはすん、と鼻をすするとパチュリーに抱きついてきた。

「みんなずっと一緒ならいいのに。お姉さまがいて、パチュリーがいて、咲夜がいて、あのよわっちゃん小悪魔だって役に立たない門番だってみんなみんな一緒に、ずっとずっと一緒にいたい」

「フラン」

パチュリーはフランドルの髪の毛をやさしく撫でる。フランドルは体重をパチュリーに預けた。そうして、まるで心臓の鼓動を確かめるかのように耳をパチュリーの胸にぴたりとつけて、目を閉じてじっとしている。

甘えん坊よね、妹様は。わたしより、年上の癖に。かわいいじゃない。

「パチュリー」

「なに」

「パチュリーの体、あたたかい。咲夜の体もあたたかかったわ」

「生きてるもの」

「でも、死んだら冷たくなる。咲夜は冷たくなる」

「そうね」

「パチュリーはなんで平気なの？ あの黒い奴だっけいつか冷たくなるんだよ。あいつの言う通りだよ。本を盗まれたって、あつという間に返ってくる。どうせあいつは時間が経てば死ぬんだもん、すぐ取り戻せる」

「フラン、あのね、死なないってことは、生きていないってことなの」

「意味わからないよ」

「生は死あってこそ。死も生あってこそ。これらは二つで一つ。どちらかが欠けても成り立たない」

「じゃあ、わたしたちはなんなの？」

「だからね、わたしたちは生きていないの。わたしたちは存在が消えるその時まで、生きていないのよ。ただそこにいるだけ」

「難しくてわかんない」

「そうね」

「どうして咲夜は死んじゃうんだろう」

「咲夜の限りある時間は、咲夜の生命いのちそのもの。咲夜があなたと過ごす時間は、咲夜の生命いのちなのよ。彼女の、あなたに対する愛情。咲夜の生命いのちを、きちんと受け止めてあげて」

フランドールはパチュリーの腕の中でよわよわしく頷く。

「パチュリーの言っていることはよくわからないけど、なるべく咲夜に優しくする。あんまり痛いことはしない。それでいい？」

「それでいいのよ、フラン」

フランドールの苦悩はパチュリーにもよくわかる。この胸が苦しいののは喘息のせいだけではない、とパチュリーは思った。

パチユリーはフランドールの柔らかな金髪を精一杯のいたわりの心を込めて撫でてやる。それに合わせるかのようにフランドールの羽がかわいらしくパタ、パタ、と動く。

「ねえパチユリー」

「なあに」

「わたし怖い」

「怖くないわよ」

「わたし怖いよ」

「怖くないのよ、だってあなたは一人じゃないから。わたしたちみんながあなたのそばにいる」

「ねえ、なんでわたしとお姉さまは体が分かれているの？　なんでわたしとパチユリーは体が別々なの？　なんでわたしと咲夜はひとつの心臓でつながっていないの？」

ああ、ほんとうに、この子は、まだこどもなんだ。例え50年近く生きていても、いつまでも、こどもなんだ。守って、あげたい。

「それはね、フラン。ほら、体が一つだったら、こうしてお互いの身体をあたためあうこともできないし、」

頬と頬をぴったりとつけ、力を込めて抱きしめる。

「こつしてキスをしてあげることできないし、」

フランドールの頬に軽く、触れるだけのキス。

「こつやって味を見ることもできないわ」

からかうようにそう言って、唇でフランドールの耳たぶをやさしく噛む。

フランドールはふふふ、くすぐりたい、と微笑んで身悶えした。

「ねえ、パチュリー、みんなわたしのこと好きなのかな」

「大好きよ。この館の者はみな、フランドールが大好きなんだから」

自分の言葉を欺瞞きまんだと思った。この館にいる者全員で、フランドールをこの寂しい部屋に幽閉している。世界の秩序を守るためとはいえ。

永遠に等しいほどの時間、フランドールはこの部屋で孤独と闘ってきた。

永遠に等しいほどの時間、フランドールはこの部屋で孤独と闘い続ける。

閉じ込められた、哀れな吸血鬼。

どうしたら、この小さくて儂い吸血鬼を救えるだろうか。

「ふふふ、今のくすぐったいの、もいつかいやって」

フランドールの明るい声が、切なく部屋に響いた。

わたしはこれからもこの痛ましい悪魔の妹を檻の中に閉じ込め続けるだろう。

せめて。

せめて、その檻の中が、暖かい場所でありますように。

パチュリーはそんな願いを込めて、フランドールを抱きしめた。

了



(後書き)

前作「フラン、血、咲夜。」の続きみたいなの。  
フラン、愛されてるじゃん。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7318j/>

---

パチュリー、甘噛み、フラン。

2010年10月12日01時42分発行